山陰両県38市町村が舞台の、38枚だけの写真集発刊

さんいんびより

福井一尊

美しい街

私は美術の教員をしている。したがって美術の専門家といえなくもないが、そこまで言い切る気分に欠ける。ただ、他科目担当の同僚よりは日ごろから美術について考える時間を生活の中で確保していることは確かなことである。

さて、この美術の「美」だが、どのようなものであろうか。日常の生活の中で、いいなあ、グッとくるわ、凄い！と思えるものに出会ったときに私たちは「かわいい」「かっこいい」「きれい」などという言葉を用いる。で、「美しい」という言葉を耳にする場面にここしばらく遭遇していない。きっと「美しい」の世界が広く大きすぎて、具体的な事例の前では扱いにくい言葉だからではないだろうか。つまり「かわいい」も「かっこいい」も「きれい」をも内含してしまうのが「美」の世界のようである。

掃除の行き届いた窓ガラスを見て「きれいなガラス」というし、甲子園中継で見る高校球児の涙には「きれいな心」を感じるという風にきれいと美しいをほとんど同じ意味で使うこともできるが、「美しい窓ガラスですね」とはあまりいわない。

たとえば美しい景色という場合でも、汚れた窓ガラスのある家が何件かあったとしても、松江城の屋根瓦がかなり傷んできていたとしても、それらを含む松江の街が美しい景色でなくなりはしない。かわいい花が咲き誇っていなくても、かっこいい近代的タワーが立ってなくても、きれいな色に満たされていなくても、きれいでない古びた家並みであっても、美しい街並みとしてその景色を私たちは感じることができるのである。

美はどこにあるのか

美の世界は随分と広そうなのだが、どこにあるのかということについても、考えてみると少々複雑である。

きれいやかっこいいは向こうからやってくる。きれいな花を持った人、かっこいい車、流れてくるきれいな音色や香りの類。しかし美は感じる人が心を開き、素直な気持ちで向き合わなければ立ち現れてはこない。つまり元から美しいものとしてあるのではなく、感じる人によって存在するもののようである。したがって、感じる人によっても美の所在は変化するのである。

日本人であれば、はかなくやがて消えゆく現象を美しいと感じることができるが、異文化に暮らす人々には同じものを目の当たりにしても美を感じるかどうかは分からないのである。つまり「美しい」は精神的な壮大な美から慈しむべき草花の可憐な色合いまでを含み、それに気づく目と心を持った者の中に現れる価値なのであろう。

カメラを持って出かけてみれば

美という価値は、こちらが耳を傾けなければ、向こうからは語りかけてくれない。その美にいかに気づき感動できるかが人生を豊かなものにするための大きな

美郷町／島根県

鍵であるように感じている。その気づきを得ることに有効なアクションの一つが、写真を撮ることだと近頃になって気づいた。

カメラを持ち、町に出ると（自然の中でもよいのだが）世界がこれまでと違って語りかけてくれる。何かを「みる」ということをより大切にすることができるあの感覚は読者の皆様も感じられたことがあるだろう。

目の前の世界をよく見て、気づき驚き感動していく過程で、自分自身の心が目の前の世界に対して開いていく感覚を覚える。そのことでさらに深い気づきに出会えるという繰り返しの中で、様々な美を知覚するのである。私はその心地よさにそのかされて今日もカメラを携えて戸外を歩く。

山陰の手触り

私は山陰に住んで八年になる。すっかり山陰の景色、季節の移ろいに私の感覚が馴染み、県外出張から戻るとホッとしさえする。すでに日々の生活の中で山陰だからという新鮮な驚きを感じることはない。

しかしどうだろう、この地域に生まれ育った人たちと同じ感覚で地域風土・文化を受け止められるかといえば、まだまだよそ者の視点でしかその一つひとつを受け止められてはいない。地域を見つめるのは、今しかないと感じた。

起こる全てが輝いて見えてしまう旅人の視点でもなく、幼いころの思い出や親戚、守るべき田畑、その全てが風土と一体として感じられる地域人としての視点でもない、今の感覚だからこそ見える景色、感じられる地域の手触りがあるように思えた。

今の自分にしか切り取れない山陰があるように感じられ、いても立ってもいられなくなった私は新しいカメラと旅行カバンを買った。

飯南町／島根県

鳥取市／鳥取県

カシャッ

一つひとつの町を訪ね、歩き疲れては泊まり、スナックで常連客と杯を交わす中で、これまで気に留められなかったそれぞれの町の体温を知り、それらは形や色となり、人々の表情や仕草となって私に迫ってくる。夢中で五感を凝らし、時にカシャッとシャッターを押す。するとまた生活の手触りが際立って感じられ、私の中の美的感覚のひだがざわつくのを感じるのである。

そうして鳥取県一九、島根県一九市町村全てを自らの肌で感じ、カメラを通して切り取った。何度訪ねても、自分の感じた肌触りと切り取った「絵」に宿るものとが自分の中で一致せず、通った町も多い。酔狂で始めたこのプロジェクトも気がつけば丸一年かかり、四万五千枚の写真が手元に残った。

さんいんびより写真展

一つの町で一〇〇〇回以上のシャッ

大山町／鳥取県

安来市／島根県

個展会場（グラントワ／島根県益田市）

ターを押した計算になるが、その町の一枚を選ぶ作業がまた面白い。

まず一〇〇枚程度を選び、並べて眺めてみるとその町が立体的に見えてくる。シャッターを押した時の気持ちや、人や風土との出会いの記憶が蘇ってくる。その中から一〇枚程度に絞り、最終的には一枚を選び出していく作業では、私の思考が複雑に重なり合い、同時に神経が研ぎ澄まされていくことを感じるのである。

シャッターを押した瞬間は目の前の世界との共鳴と対話であるが、選んでいく作業は自分の知識や経験との感覚的なやりとりであり、極めて繊細で個人的な芸術的営みであった。

そうして選んだ三三八市町村が舞台の三八枚の写真は空間作品「さんいんびより」として展覧会を開催した。作品は大きさをまちまちにプリントし、地域性や町の大小にかかわらず空間構成のみを意識して三八枚の写真による空間作品と性格づけた。つまり、展覧会場に入り、三八枚の写真に囲まれた鑑賞者が空間から今の山陰を感じられる「装置」としての空間作品にしたのである。

また展覧会を両県四会場で巡回させ、その空間自体が山陰地域の東西端の約三〇〇キロを移動していくことに今日的なアート活動としての成立を目指したのである。

■「さんいんびより　福井一尊作品展」

・島根県芸術文化センター・グラントワ（島根県益田市）平成24年12月

・ギャラリーそら（鳥取県鳥取市）平成24年12月から25年1月

・民芸画廊（鳥取県倉吉市）平成25年3月

・島根県立美術館（島根県松江市）平成25年3月

そして写真集の発刊

山陰両県四会場での個展には幅広い年代の多くの来場者を得ることができた。マスコミ等にも数多く取り上げて頂いたことから地域において高い関心を得て、社会的意義を認められたように感じられる。

【会場アンケートから】

■益田会場

（高校生）隠岐の島に家があるけど、あ

邑南町／島根県

浜田市／島根県

隠岐の島町／島根県

伯耆町／鳥取県

海士町／島根県

写真集「さんいんびより」表紙

の風景は見たことがなかったので、今度見つけに行きたいです。

（50代）益田の海がこんなにきれいなのかと改めて感じさせられました。

（70代）心が豊かになりました。写真でこんなに感動を与えてもらえるとこの年で知りました。もっと作品を見てみたいです。

■鳥取会場

（20代）普段見ていても気づかない空や、空間がとてもきれいに写っていてびっくりしました。

（40代）美しい風景は必ずしも古くて歴史のある日本の原風景と呼ばれるものの中にだけあるのではないのだなと感じました。

（60代）構図が良い。色が良い。光が良い。写真の「ネライ」が素晴らしい。

アンケートからは、このように作品との間に生まれた関係を楽しんだご感想を多数いただき、また写真集として書籍化することへの期待が寄せられたため、写真集「さんいんびより　福井一尊」を平成26年度に今井出版より発刊することとなる。

この写真集の作品は、残念ながら本誌（のんびり雲）には掲載していないが、生活や景色、手触りや息づかいの「今」を、次の五つの絵画的要素によって切り取ったものである。

「形と線」――形と形の間にできる線、面と面との組み合わせ。

「陰影」――物が立体的に見えるのは光が当たる所と陰になるところの組み合わせによる。そもそも全てのものは光が当たっているからこそ見える。

「色彩」――色彩自体の持つ力の強弱もそれぞれである。

「質感」――素材には素材感が、肌触りがある。

それらによる全体の「画面構成」も大切である。

作品の芸術的訴求力は、これらによって宿るのである。前述で、美とは見る者の中に立ち現れてくるものだと書いたが、この写真集を手にした方々が、その人のその時にしか感じられない美に出会っていただけたとしたら、制作者としてこんなに嬉しいことはない。

カメラを構え続ける中で気がついたこと、その一番は山陰は色鮮やかであるということである。えーそうかなあ？と感じた人も、それぞれがカメラを持って（携帯電話のカメラでもよいので）「さんいんびより」という美を探して歩いてみるときっと分かる。きっとささやかな美の発見に驚き、あなたがいくつであっても心を揺さぶられる瞬間に出会うであろう。山陰にはその対象がいくつもあることに気づくだろう。

人それぞれその歳の今は、当然今しかないのだからこそ、その美に気づいた自分の感覚を信じ、大切にしてあげても、そしてもっと自分自身を愛してあげてもいいのだと思う。成熟したこの国を構成する我々は、経済発展や他者との比較だけが幸福の手がかりではないことを知っているのだから。

（ふくい・かずたか／保育学科教員＊美術）

浜田市／島根県

美郷町／島根県

吉賀町／島根県

日本や世界各地からの参加者たち。

七月一日。黄昏時を迎えるころ、成田空港第一ターミナルのエティハド航空カウンター前では、「久しぶり、元気だった？　これからよろしくね！」といった会話があちこちから聞こえる。総勢二九名。宮城・神奈川・東京・静岡・富山・島根・広島・熊本の各地から小泉八雲没後一一〇年記念事業へ参加するため、ギリシャのレフカダをめざす人たちだ。現在、ギリシャへの直行便はないので、ヨーロッパのどこかの都市を経由するか、中東を経由するのが一般的だ。今回はアラブ首長国連邦のアブダビを経由して、二三時間かけてアテネに入るコースだ。

この記念事業の総合テーマは「オープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーン――西洋から東洋へ――」。日本のハーンゆかりの各地の自治体や研究・顕彰団体で実行委員会を組織し、三つの事業を行った。レフカダ文化センター内に「ラフカディオ・ハーン・ヒストリカル・センター」すなわちヨーロッパ初のハーン・ミュージアムをオープンすること。国際シンポジウムを開催し、ハーンの「オープン・マインド」の意味とその事績の現代社会への活用の可能性を、日本・ギリシャ・アイルランド・マルティニーク（フランスの海外県）出身の九人のパネリストにより検証すること。そして松江出身の佐野史郎さん・山本恭司さんによる朗

ギリシャだより

小泉八雲没後 110 年記念事業「オープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーン――西洋から東洋へ――」を終えて

文：小泉　凡
写真：高嶋敏展

ギリシャ記念事業の発案者、タキスさんとともに。

（右）レフカダ詩人公園のハーン記念碑前で。（左上）タベルナでの夕食風景。（左下）カラマリのから揚げ。ギリシャでは超ポピュラー。

読ライブ「望郷――失われることのない永遠の魂の故郷――」と熊本県山都町に伝わる人形浄瑠璃、清和文楽による「雪女」の初のレフカダ公演を行うことだ。

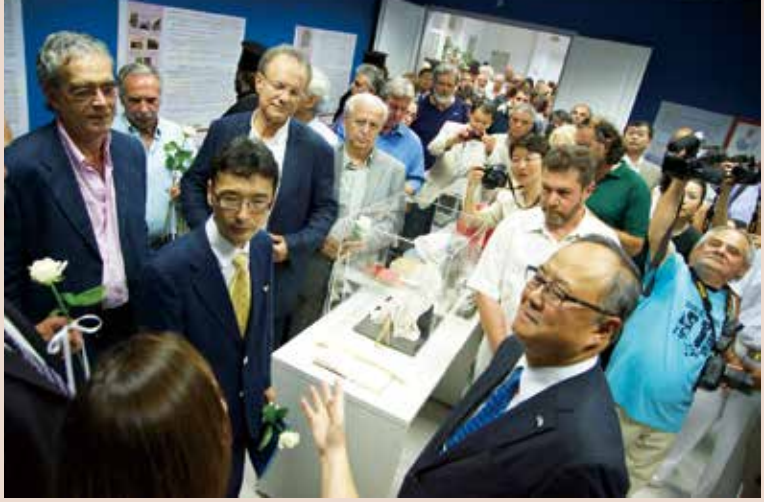
レフカダへ

七月二日午後、無事、アテネに入った一行は、二日間をアテネで過ごした。その間に、友人のヤニス・フィカスという考古学者が勤めているニューヨーク・カレッジで、松江の中村茶舗の社長、中村寿男氏らによる松江と茶の湯の文化紹介が行われ、来場者全員がお点前を体験した。ギリシャ人にとって初体験であるこの実践は不可思議で、かなり刺激的だったようで笑顔が絶えることがなかった。山野で採取したカモミールやファスコミロなどのハーブをお茶にして飲む慣習のあるギリシャ人には、抹茶もその延長線上と捉えるのかもしれない。ギリシャでは、和食がいま、ようやく注目され始めてきた。時々立ち寄る「風林火山」という日本料理店は、近年、行くたびに忙しさを増している。

七月四日朝、三台のバスと一台の車で、一行はレフカダへ出発する。アテネでは、別便で到着した熊本からの約三〇名の参加者とギリシャ人の同時通訳者やボランティア・スタッフ、アメリカからの参加者も加わって総勢は六〇名を超えた。アテネ・レフカダ間はおよそ三五〇キロの道のり。六時間以上かかる。ギリシャという国は、南に位置する首都のアテネと北に位置する第二の都市テッサロニキがあるマケドニア地方を結ぶ高速道路は非常によく整備されているが、イオニア地方とを結ぶ東西の高速道路は部分的にしかできていないのだ。

四時間ほど走ったところで昼食をとる。イオニア海に面したメソロンギという、珍味・カラスミで有名な町だ。この辺りは、西風が強いためか、長い年月をかけてできた砂州で海のあちこちがせき止められ、潟湖を形成している。宍道湖や中海、あるいは浜名湖などと紛う光景だ。当然、そうなるとスズキ、鰻などが特産となる。この日は、グリーク・サラダに鰻の煮つけ、スズキとタコの炭火焼、カラマリ（小型のイカ）のフライ。ギリシャ・スタイルのサラダ（グリーク・サラダ）は、キューリやトマトをざっくりと切り、オリーブの実を入れ、それに巨大なフェタチーズ（山羊のチーズ）を載せて食べる。ドレッシングは塩・胡椒・オリーブオイルのみ。きわめてシンプルな調理法だ。

いつもギリシャで「すごい」と感じるのは、破綻しかけたような経済状況にある小国でありながら、穀物を若干輸入しているものの、ほぼ食糧は自給できている点だ。目の前で獲れた魚を炭火で焼くか、揚げるかし、それに地元のオリーブオイルとレモンをたっぷりかける。そして豊富な地野菜と、地元のブドウでつくった白ワインとともに二時間以上かけてランチを楽しむ。自然に逆らわないス



（上）ハーン・ミュージアムのオープニング。（下）シンポジウムの風景。

ローライフだ。朝食には欠かせないヨーグルトと蜂蜜も世界から垂涎される絶品。天然鰻でさえ、まだ高級魚という認識は薄く、昨年エトリコという小さな町で注文した時には、一匹焼いてもらって一二〇〇円ほどだった。まちのタベルナ（食堂）は、地域住民のコミュニケーションの場であり、一人暮らしの老人たちの生存確認の大切な場ともなっている。

ラフカディオ・ハーン・ヒストリカル・センター

午後五時に予定より二時間遅れてレフカダ着。

午後七時から「ラフカディオ・ハーン・ヒストリカル・センター」のオープニングが行われる。これはヨーロッパ初のハーン・ミュージアムである。レフカダ市が提供した二部屋をリフォームし、壁面に解説パネルや写真を展示。展示ケースには、ギリシャ人のハーン愛好家のタキス・エフスタシウさんから寄贈された初版本や日本のハーンゆかりの地の自治体や団体、小泉家が提供した遺品や原稿のレプリカが陳列された。松江市からは「耳なし芳一」の草稿と愛用のペン、ペン皿のレプリカ（袖師窯）、高嶋敏展氏の写真作品を寄贈した。

ボランティアでアテネから何度も足を運び、展示を仕上げたマリア・ゲネツェリューさんは、国立ギリシャ銀行の学芸員で一四歳からハーンを愛読している。マリアさんなしではミュージアムはオープンできなかった。イラストレーターのテティ・ソローさんもハーンの愛読者で、このたびの記念事業の直前に『怪談』『骨董』『日本雑記』のギリシャ語訳を出版し、オープンにはずみがついた。

レフカダ市長、西林日本大使と私のスピーチに続き、熊本から参加した、人形浄瑠璃「清和文楽」の人形がテープカットを行い、待望の施設がオープンする。ほとんどボランティアの力で出来上がったこの小さな手作りのミュージアムのオープンは、実に感無量だった。

シンポジウム

ハーンは、「世界が必要を感じているのは、古代ギリシャの幸福と優しさの精神の回復」と述べるほど古代ギリシャへの憧れを抱いていた。シンポジウムのテーマは「オープン・マインド・オブ・ラフカディオ・ハーン」。このテーマの発案者もタキスさんで、二〇〇九年から同じテーマで現代アート展を行い、世界を巡回させている。

七月五日朝、シンポジウムに先立ち、私がハーンの「オープン・マインド」の熟成過程とその文化背景をスライドショーで示した。その後、二日間にわたって「教室のオープン・マインド」「流浪と探求の旅」「想像のギリシャ」「再話文学の世界性」「トランスナショナル」「仏教」「エグゾティシズムと文化越境」「文化的アイデンティティ」「ゴシック・ホラー」という多様な切り口からハーンのオープン・マインド形成の軌跡にアプローチがなされた。

座長をつとめたアラン・ローゼンさんの結びの言葉からその要旨を紹介する。文化的境界の曖昧な地点に立ち位置を置くハーン。怒りも偏見もあったが、それを認めつつ彼は常に新しいものや違った

イオニア海の夕暮れ。

ものに対して興味と好奇心を持って近づこうとした。それこそが彼のオープン・マインドの源だ。つねに新しいものへの可能性があることを現代の子どもたちに伝えるべきだ。参加した複数のパネリストから「こんな創造的なシンポジウムに参加できて感動した」という言葉をいただいた。半年にわたり、松江で世界のパネリストとの調整役をしてこられた島根大学の長岡真吾さん、そして事業のプロデュースに心血を注いだ妻の力に感謝したい。

（上）感動を与えた朗読ライブ。佐野史郎氏と山本恭司氏。（下）中村寿男さん・万紀子さんによるお茶の文化と松江の紹介。コルフ島アジア博物館。

パフォーマンス

五日の朗読ライブは、イオニア海に陽が傾く、午後九時半から野外劇場で始まる。小泉八雲作品の朗読ライブは八年前に松江で始まり、総合芸術としての完成度を高めながら松江の文化資源として定着しつつある。佐野史郎さんと山本恭司さんは、ハーンが日本時代の幸せな時間に紡いだ作品を故郷レフカダとハーンの最愛の人、ギリシャ人の母ローザの魂に報告するという思いで臨んだという。

レフカダ時代のハーンの微かな記憶が顔を出す作品「夏の日の夢」（『東の国から』）に始まり、『知られぬ日本の面影』・『心』・『日本のお伽噺』に収められた短編物語から日本文化の機微にせまる。そして中期の哲学的エッセー「つゆのひとしずく」（『骨董』）で結ぶ。朝露のひとしずくに映る逆さまになった風景を見て、ハーンは、この露のひとしずくと自分の肉体とは変わらない存在だと感じる。哲学と芸術が大好きなギリシャ人にはとても共感できる作品だ。英語とギリシャ語の字幕スーパーも観客の理解を助けた。最後にはスタンディング・オベイションとなった。言葉の壁を越えて観客の心に届いたようだ。朗読ライブは、七月七日にイオニア諸島最北の島コルフ島でも行われた。

直近のレフカダからの報告では、新しいハーン・ミュージアムには噂を聞きつけた島民が次々と訪れ、市は予定を変更し、一日に二度（午前と夕方）開館することを決定した。この国では、一日を二度に分けて使うのだ。午後三時過ぎの昼食、その後の昼寝（シエスタ）と散歩を経て、後半は夜を迎えてから始まるからだ。

地域の子どもたちもサマー・プログラムの一環でミュージアムを訪れているという。ミシュランガイドからも掲載したいと問い合わせが来ている。これこそ記念事業の嬉しい成果だと思っている。「オープン・マインド」という言葉自体が人々を平和でポジティブな方向へ導いてくれたように感じる。

（こいずみ・ぼん／総合文化学科教員）
（たかしま・としのぶ／写真家）

レフカダの落日。

日の出湯の日々

（米子市）

日下朋子

私は「銭湯」というものに入ったことがありませんでした。銭湯ってどんなところだろう。私のように銭湯という言葉は知っていても、実際に行ったことのない若者は増加の一途をたどっているのではないでしょうか。

銭湯は町にひとつはあってほしい市民の憩いの場。でも、島根県には銭湯がありません。もちろん松江にもありません。松江最後の銭湯「きらく湯」は二〇〇七年五月九日に営業を終了しました（『のんびり雲』第1号「きらく湯よ、ごちそうさまでした」）。島根に銭湯はないけれど、一度は銭湯に行ってみたい……。

ということで、今でも銭湯があるという鳥取県の米子に出かけようと思い立ちました。目指すは九十年以上脈々と歴史を紡いできた老舗の「日の出湯」です。銭湯は、どんなところなのでしょう。ついに銭湯デビューです！

「日の出湯」の日の出

「日の出湯」は創業が大正十（一九二一）年。かつてそこで「大山から昇る朝日」が見えたことから命名されたらしい。と、朗らかに笑いながら女将の小林圭子さん（70）が説明してくださいました。現在、日の出湯から大山の朝日を拝むことはできませんが、そこはかとなく想像することができます。

お風呂が備え付けられていない家庭が多かった時代には、家族総出で銭湯に出かけたそうです。「銭湯は社交の場でいつもにぎやかだった。お風呂の時間帯になると沢山の人がこらいて、人でごった返した。今はどこの家にもお風呂があるし、料金も高いが～」と女将さんは懐かしそうに言われました。今は四百円の入浴料だけど、圭子さんが嫁いでこられた昭和四十六年ころは四十円でした。

昔に比べると利用するお客さんはうんと減ったそうですが、一人暮らしの方や高齢の方などで銭湯を必要としている人もいます。女将さんが番台から見守る銭湯「日の出湯」は生活様式が変わった現代でも、まだまだ憩いの場なのです。人々の生活に潤いをもたらし、ゆっくりと昇る日の出のようにゆったりとした気持ちにしてくれます。

人間情緒・お湯のように暖かい

春・夏・秋・冬、季節は巡ります。気候の変化によって体感温度も変わり、私たちはお風呂の温度にもこだわりをもちます。「日の出湯」では、天候や季節によってお湯の温度を変えています。お客さんにとって一番いいお湯で疲れを癒

■（右上）圭子さん。とびきりの笑顔。（上段中）昔懐かしい体重計。（左上）お釜ドライヤー。（左中段）取材風景。（右下）脱衣場。（下段中）牛乳石鹸。（左下）日の出湯のある通り。

し、ほっとしていただくために夏はぬるめのお湯、冬は熱めのお湯にします。

今では地下水の汲み上げ・濾過・加温を機械でしているため、比較的労力は減ったそうです。圭子さんが嫁いでこられたのは昭和四十六年ですが、昔は汲み上げた地下水を廃材を燃やして温めていたのです。

スイッチ一つで機械を操作することは便利だけれど、一つ間違えると重大なことになります。ある日はお客さんが「変だわー、変だわー」と言ってきたため、湯船に張られたお湯を見てみると……濁ったお湯が！　濾過スイッチを入れ忘れていたのです。

またある日にはお客さんが「ぼんやりとした湯だった。ぬくもりで熱くもなく、のんびり包まれてええなあ」と一言。「熱い湯が好きな人、ぬるい湯が好きな人がいるけれど、この一言がもらえると嬉しい」と女将さんははにかむ。こんな人間情緒あふれる銭湯ってすてきです。

祝・銭湯デビュー

「日の出湯」に到着し、まず迎えてくれたのが扇形の照明看板。この珍しい形の照明看板は先代がデザインしたものだそうです。左が男湯、右が女湯でそれぞれの暖簾が入口に掛かっていました。

簡素で、のんびりとした古い外観は、町の中でちんまりと存在感を放っており、暖簾をくぐるとまるで昭和にタイムスリップしたかのような感覚さえ覚える内装。そして、優しげにほほ笑みながら番台に座る女将さん。四百円を番台に置き、下駄箱に靴をしまい脱衣場へ向かいます。

長年、沢山のお客さんの足に踏まれた板張りの床はつるつるに磨かれて光沢を放っていました。使い古された、味のある、何とも言えない色味。脱衣箱は三十～四十年前に廃業した他の銭湯から譲り受けたもの。それ以前は、各扉に「いろは」の文字が振られた木製の脱衣箱を使っていたそうで、女将さんは「価値がわかってなかった。もったいないことしたわー」とぽつり。

辺りを見渡すと、がっしりした古い体重計、大きな古い鏡、おかまドライヤー、木の机、休憩椅子など、これまでに見たことのないようなものが目を引きます。これが銭湯！　町の人々に愛され、今まで続いてきたもの。温泉とはひと味違う空間に心癒されます。

ひとっぷろは極上の味

昭和の空間を堪能した後、いよいよ奥の浴室へと進む。引き戸に手をかけ、ガラリと戸を開ける。するとそこには……いつもとは違う空間。不思議な空間。これが銭湯かー!!　すこしざらざらとした床と、泡がゴーゴーと出るジャグジーつきの浴槽、その奥には淡い光に照らされて花が飾られています。

まずは桶にお湯を……と思ったら「あれれ、なんだか勝手が違う。赤と青のボ

タン？　どうやって使うのかな？　そうか！　赤がお湯で青が水なのか」。なんと温度調節が必要な蛇口……感激です。ボタンを押す感触がたまりません。

ゆっくりと湯船へ向かう。まずはお湯の温度を確かめる。柔らかですこしとろとろとしたお湯です。準備は整った。いざ！　参ろう。片足を入れ、もう片足を入れる。とても深い湯船です。足を伸ばして体の芯まで温まります。上を見上げると天窓があります。天窓から射し込む日の光。日が高いうちのお風呂は至福、極上。家で日の高いうちに湯船をためることの少ない私にとっては新鮮でした。銭湯の醍醐味です。

■（右上）女湯の浴室。（左上）光がふりそそぐ幻想的な天窓。（右中段）牛乳とコーヒー牛乳。（右下）上に長靴が置いてある下駄箱。（左下）赤と青のボタンが存在感を放つ。

「日の出湯」の日々

「よいしょ、どっこいしょ」の掛け声で番台へ上がる女将さん。「ずっと番台に座っているから足が衰えてねー。上がるのも一苦労」と豪快に笑う。日の出湯では、日曜日を除いて、毎日、十五時から二十一時まで営業していますが、基本女将さんが番台にいます。

夕飯時にはご飯を作るために夫の道正さん（72）にバトンタッチして家に帰ります。そして、夕飯を終えた女将さんが再び番台に上がり、道正さんが夕食を食べに帰ります。ふたりで切り盛りする銭湯はゆっくりと流れる時間の中にありました。そんな日の出湯を訪れるお客さんの中には色々な人がおられます。

銭湯にはタオル持参で行くのが道理ですが、タオルを持たないでくるお客さんもいます。最初からタオルを忘れたお客さんのための貸し出し用を当てにしているのです。常連さんのなかには、「このタオルがいい」「今日はあのタオルないの」と、いつも自分好みのタオルを借りる方もおられるそうです。

寒い冬のある日、酔っぱらったおじさんが顔を出され、制止したにもかかわらず湯船に入り、倒れたことがあるそうです。救急車を呼ぶ前に息を吹き返したけど、お客さんが「救急車を呼んでほしい」と言い、救急車に乗って行ってしまったため、靴がそのまま「日の出湯」に残っています。「大事だった。あの一回だけ来らいて、それからは来られん。靴だけ

■（左）にぎやかに会話する圭子さんと道正さん。（右）番台に座る圭子さん。傍らには貸し出し用のタオル。

まだ靴箱に置いてある。捨てるのもなあて。でも、きしゃがわる、じゃまがわるいがー」と少々困り顔。

義方小学校の二年生の子供たちが毎年社会見学に来ます。ピーチク、パーチクにぎやかです。社会見学の後、「日の出湯」を気に入った子が家族と一緒に風呂に入りに来ることもあるそうです。時々、こんな騒動もあるけれど、「日の出湯」の日々はゆっくりと流れていきます。

歴史をつなぐ

創業が大正十年で、九十三年続く銭湯「日の出湯」。そろそろ機械類にもガタがきています。女将さん・旦那さんも七十代。機械は、全部買い替えると五百万円ほどするそうで、「高価だから、壊れたらやめたくなる」と女将さんは言われます。「古いものがどんどんなくなるご時世で、米子は商売の町なのでよけいに……」と、残念そうです。

「日の出湯」の存在は貴重です。以前は十五軒くらいもあった米子の銭湯も年々減少し、今では三軒にまで減ったそうです。しかし、この渋い銭湯がなくなるのは寂しく思います。これからも続いてほしいです。

「社会奉仕のようなもの。一日をほっとしていただけたら……」

女将の圭子さんのご主人、道正さんは公務員でした。住まいも「日の出湯」とは離れていたため、銭湯に嫁ぐという意識はありませんでした。まさか自分が番台に上がるなんて夢にも思わなかったそうです。しかし、平成十三年におじいさん（ご主人のお父さん）が亡くなられ、その後、銭湯の仕事を一手に引き受けてきたおばあさん（ご主人のお母さん）も平成二十年に亡くなられたことから圭子さんは銭湯の仕事を継ぐことになりました。

日の出は町を照らす

「儲けにならない銭湯の商いで、もうやめたいと何度も思いましたよ。でも、一人暮らしで風呂掃除ができない高齢者や、わざわざ銭湯に入るためにバスや電車で来られるお客さんもいるんです。どこかの銭湯が残らないといけない。やめたくなることもあるけど、一番心の支えになるのがお客さんの『ありがとう。来てよかった。気持ちよかった』という温かい言葉です。そうすると、やっていて良かったと思える。それが続けている理由」と、圭子さんは静かにほほ笑みながら話してくださいました。

取材の後、離れの二階に案内していただき、お抹茶をごちそうになりました。昔、おじいさんとおばあさんは、この二階で暮らしておられたそうです。ここには台所もあり、立派な家具もあります。これらの家具は、お酒も賭博もされなかったおじいさんが骨董集めの趣味で手に入れたものだそうです。なお、圭子さん、道正さんは銭湯のすぐ裏手に引っ越してきたため食事を作りに帰るときなど、とても便利です。

私にとってこの取材は、古き良き日本の文化と、人と人とのつながりを再認識でき、よい経験になりました。話を聞いていくうちに、小林さん夫妻の温かさや人情に触れることができました。そして、「日の出湯」が人々に愛され、この時代まで脈々と続いてきた理由がわかりました。私も「日の出湯」のようにゆっくりと歴史を刻みながら、小林さん夫妻のようにあたたかな人情あふれる人になりたいです。

（くさか・ともこ／文化資源学系二年生）

■（上段）みんなで記念写真。（下段左）扇風機と戯れる筆者。（下段右）銭湯の離れ。手前は駐車場。

■色とりどりの駄菓子が並ぶ「ひのごや」さん。

魅力発見！出雲中町商店街

大峠百花

シャッター街――まさにこの言葉がぴったりだった中町商店街は、少しずつではありますが以前のような活気を取り戻しつつあります。私はずっと近所に住んでいますが、私の記憶の中にあるのはシャッター。それ以前を知らない人間です。これまで中町商店街のお店に入ったことはほとんどありませんでしたが、いい機会だと思い、思い切って飛び込んでみることにしました。するとそこには素敵な出会いと発見がありました。

ひのごや

店内に入ってまず目に飛び込んでくるのが駄菓子、そしてお酒。六代目店主の樋野泰男さんにお話を伺うと、ここ「ひのごや」さんは創業がなんと明治二年！もともとは麹屋さんとして始まったそうです。そういえば店の前に白くてふわふわしたものが置いてあったな。あれが麹というものなのか。昔は多くの家が味噌を自宅で作っていて麹を買いに来る人が多かったそうです。しかし、徐々に少なくなってきました。最近塩麹ブームが到来したけど、麹が一、二斗必要な味噌に比べ、塩麹は百～二百グラムしか必要ではないため「商売にならない」ともらしておられました。

お店の奥にある麹の製造場を見せていただきました。中に入ってみるとなんだか不思議な香りが。そこには「もろふた」という見たこともない室の道具がたくさんありました。

ところで麹屋さんなのになぜ駄菓子が？という疑問についてですが……昔はお菓子のほかに果物やパンなどを売っていたけど、スーパーなどが周りにできてから売れなくなったそうです。しかし、その中でも百～二百円くらいのお菓子は売れ続けたそうで、売れ続けたものだけ

を残した結果、今のような形になりました。「お客さんが作り上げてきた店なんです」と樋野さんはおっしゃっていました。駄菓子と麹という異色のコラボを果たした不思議なお店でした。

布野靴店

「字が読めない……」と私たちが悪戦苦闘していたところ、「〝ふの〟と読むんですよ」とお店の中から出てきて教えてくださった店主の布野芳江さん。布野の野の字が崩してあったんです。靴の仕入れは東京で行いますが東京にはない名前なのだそうです。しばらく名前トークで盛り上がったところで店内へ。創業は約八十年前。レトロでおしゃれな雰囲気の店内にはなんだかお高そうな婦人靴がズラリ。三十〜五十代の奥様方が買われていくそうで、高いもので二万円！「大人になったら買いに来てね」と布野さん。頑張ります！

國美喜書店

私は以前からこのお店が気になっていたのですがなかなか勇気が出ず、入れずにいました。しかし、今回取材というチャンスが到来したのでようやく潜入することができました。

中に入ってみると古本が所狭しと並んでいました。ほかにも昭和の香りがする「すごろく」など、とにかく古くてどこかなつかしい物がたくさん。仮面ライダーが大好きな佐々木さんが歴代仮面ライダーの雑誌を見てとてもうれしそうにしていたのが印象的でした。

店主の桑原明夫さんにお話を伺ったところ「自分の手で将来こういう店をやりたいと思っていた」そうです。そのために、三十年前からこつこつ集めてこられました。奥さん曰く「主人は昔から集めることが好き」。自他ともに認める収集癖の持ち主なのだそうです。元明星の読者として今はなき平凡を見て感動するなど、少しの間だけタイムスリップしたような気分になりました。

こじまクラフト

店の外に古い電動三輪車、たばこの看板、ラジオ……。店内には古いものがたくさん並んでおり、とてもレトロな雰囲気。私はよく分らなかったのですが、ほかのメンバーは国鉄時計と船時計にとても反応していました。

ここでアルバイトをされているという掘江麻理子さんに最近売れているものを伺ったところ、若い女性が買われていくという布の絣。「いろんなものが出てくるから楽しい」と本当に楽しそうに話されていたのが印象的でした。

桃花園

朝から取材で立ちっぱなし、歩きっぱなしだったため、お腹を空かせた私たちは中華料理屋の桃花園に行くことに。中華料理屋によくある回転式のテーブルを目の当たりにして感動し、思わずくるくる回してしまいました。

■（右上）「ひのごや」店主の樋野さんに取材中。（中央）初めて目にする麹。（左上）「ふの」って読めますか？（右下）古本を手に笑顔の香川さん。（左下）國美喜書店のご主人は貴重な江戸本を見せてくださいました！

■（上）骨董品が並び、レトロな雰囲気の「こじまクラフト」。（左下）これは船時計だそうです。（右下）店外にも珍しい品が。

■（右上）料理を前にして嬉しそうな筆者。（右下）最後まで笑顔で見送ってくださいました。（上段中）美しい着物にほれぼれ。（左上）これを着て花火を見に行きたいです。（中央）奥にはどんな世界が広がっているのでしょうか。入ってからのお楽しみです。（下段中）かわいいリボンがいっぱい。（左下）マリメッコのコップを手に。

私は一番人気だという海鮮あんかけチャーハンを注文しました。エビが大きくてプリプリでとてもおいしかったです。みんなで杏仁豆腐を分けて食べようと二つ注文したのですが、全部の料理に小さな杏仁豆腐が付いてきて、みんなで笑ってしまいました。どちらもおいしくいただきました。

お店を営んでいる盧政子さんは中国人の三世。ご主人も二世なのだそうで、本格的な中華料理を味わうことができます。「塩味の焼きビーフンはどこにも負けない」と盧さん。今度食べに行きたいと思います。

石橋呉服店

創業百二十九年の歴史ある呉服店だとどこかで伺ったことがあるので入ってみることにしました。ちょうど夏祭りシーズンということもあり、かわいらしい浴衣、綺麗な浴衣がズラリ。

私は着物を間近で見たことがなかったので、従業員の石橋ゆかりさんに見せていただきました。見せていただいたのは白い生地に花があしらわれた着物。あまりにも美しくてほれぼれしてしまいました。着物は嫁入り道具としてだけではなく入学式用にも買っていかれるそうです。知識が増えて少しだけ大人になれたような気がしました。

学生専科やまね

制服が懐かしくなってふらっと立ち寄ってみました。従業員の山根紀美子さんにお話を伺ったところ、ここでは中高生の制服を取り扱っています。ほかにもブラスバンド部や合唱部の生徒さんがコンクール用の衣装を買っていくこともあるそうです。ほかにもリボンや缶ペンケースなどが揃えてあり、学生には嬉しいお店です。

フランセ

少し薄暗くて怪しげな雰囲気を醸し出しているこのお店は小さい頃からとても気になっていました。なかなか入れずにいましたが、今回思い切って入ってみました。実際に店内に入ってみるとその心配は消え去りました。おしゃれな服や雑貨。アクセサリーや輸入品のお菓子。そして、優しそうな店主さんが迎えてくれました。

早速『のんびり雲』をお渡ししたところ、小泉先生が書かれた海外紀行に興味津津の様子でした。それを見ながら奥さんとの新婚旅行は「ドイツ、フランス、スイスに行った」と店主の片岡靖雄さん。しかし片岡さんは、城と石畳ばかり見ていて奥さんを少し困らせておられたようです。

中町商店街に歩けないほどの人が集まっていた時代、このお店は喫茶店がメインだったそうです。目玉料理はスパゲッティミートソースです。なんだかお腹が空いてしまいました。見た目はほんわかした片岡さんですが、お話がユニー

クで楽しくて時間があっという間に過ぎてしまいます。

理容室槙野

昭和三年に創業された理容室槙野。店主の槙野功さんによると、常連のお客さんの中で最年長は九十四歳。なんと、三世代で通われているそうです。すごい！ブラジル人のお客さんも来られ、「エルビス・プレスリーにしてくれ」と注文されるそうです。エルビスさんってどなたなのでしょうか。ミュージシャンなんですね。知りませんでした。

即興でヘアカットシーンを披露していただいたり、パーマ台の前に座らせていただいたり、私の持っているカメラに興味を持たれた三男の桂三さんにカメラを貸して撮影会（おもに愛犬のココア）が始まったりと、本当に楽しい時間を過ごさせていただきました。最後には自宅で育てておられるトマトとシシトウまでいただいてしまいました。

■（右上）旭日の酒樽。（左上）副杜氏の寺田さんはとても熱く語ってくださいました。（左下）大きな酒タンク。（右中段）一度はパーマをかけてみたいものです。（右下）愛犬のココアちゃんがとてもかわいかったです。

旭日酒造

杉玉がぶら下がっている店内に入ると沢山のお酒が目に飛び込んできました。十代目当主の佐藤誠一さんによると旭日酒造さんのお酒はやや辛口で味はしっかり。そして後味がさっぱりしているそうです。よく見てみるとお酒が置いてある台は何かの蓋？　副杜氏の寺田栄里子さん（佐藤さんの娘さん）曰く、「仕込み桶の蓋です。味があって大好き」と幸せそうに語っておられました。

寺田さんに酒蔵を見せていただきました。奥の方まで酒蔵が広がっていてびっくり。お店の奥にはこんな世界が広がっていたのかと感動してしまいました。今の時期はお酒の生産を行っていなかったのですが、日本酒の香りがふんわりと漂っていました。酒蔵は建て替えられないそうです。「住み着いている酵母がいたずらしている」からです。酵母に対する愛情が伝わってきました。

彼女は以前はお酒造りにまったく興味がなく、京都でお茶屋さんに勤めておられました。しかし、ご両親に少し手伝ってほしいと言われて帰ったところ、急にはまってしまったそうです。「自分が作り出すもので色々な人と繋がれることを知ったから」。酒米の生産地に行って草刈りの手伝いをしたり、逆に農家の方が酒造りの体験に来られたりします。「住民同士が横で繋がれば力になる。繋がれば自然と人が集まってくる」と寺田さんは言います。

実際に中町商店街のお店に飛び込んでみると、どこも素敵なお店ばかりで「なんで今まで魅力に気づかなかったのだろう……」と強く感じました。中町商店街には隠れた文化資源がたくさん埋まっています。その資源を中町商店街に合ったやり方で生かしていけば変わることができると思います。可能性は無限大です。

旭日酒造の寺田さんが「昔に戻ろうとするのではなく、今をどうしていくかということが大事」と言っておられました。そのためには昔を知らないほうがいいのだそうです。ですから「昔を知らない若い人たちの力を貸してほしい」とお願いされました。

中町商店街の革命に少しでも貢献できるよう、これから学びを深めていこうと思います。

（おおとうげ・ももか／文化資源学系一年生）

■「ホタルと神楽の夕べ」。「国譲」での餅まきの様子。

人々をつなぐ伝統神楽

雲南市大東町小河内社中を訪ねて

伊藤瑳紀

日本で古くから続く伝統芸能の一つに、神楽があります。

私は山口県の出身ですが、初めて神楽を見たのは保育園の頃。地元のお祭りで神楽を見ている人々の姿はとても楽しそうで、大人たちの笑顔と砕けた雰囲気がとても印象的でした。

地域の伝統芸能を続けることはとても難しいことだと思いますが、神楽を継承されている方々は何を感じていらっしゃるのか聞いてみたい。また神楽のことをもっと知りたい。そんな思いから、島根県出雲地方の中でも神楽が盛んな地域、雲南市大東町を訪ねることにしました。大東町には五つの神楽社中がありますが、今回お世話になったのは小河内社中のみなさんです。

ホタルと神楽の夕べ

六月十四日、大東町小河内で「ホタルと神楽の夕べ」という催しがあり、私も縁あって参加することができました。出雲神楽とはどんなものなのだろうとワクワクしながら会場の「なごやか会館」に向かいました。

開演は午後七時三〇分、客席は野外です。外はどんどん薄暗くなっていき雰囲気は最高。会場にはたくさんのお客さんが来られますが、全員におにぎりが配られ、また屋台も出ていて、とても楽しく神楽を見ることができます。着いてすぐに私たち取材班は小河内社中のみなさんに挨拶に行きました。そこで、代表の松

本廣志さんと少しお話をさせていただきました。計三回にわたる取材の、第一回目のスタートです。

舞台裏には多くの関係者の方々がいらっしゃいました。そこでなんと、「簸の川大蛇」に登場する奇稲田姫の役が男子高校生だということを発見。もう何度も出演しているそうです。姫役には背格好的にすらっと背の高い若い人がなることが多いのだとか。ほかにも笛や合調子に、地元の女子高校生の方が参加されていました。

子供神楽なら見たことがあるのですが、若い人が大人に交じって神楽に参加しているのは初めて見たので、最初は驚きました。しかし、彼女たちの話によれば地元の海潮中学校には神楽部というものもあるようで、若者の神楽への参加はそう珍しいことでもないようです。

地域の中の神楽

私たちは一番前の席で演舞を見ることができました。

近くで見た神楽はすごい迫力で、キレや躍動感がビシビシ伝わってきます。奏楽の笛や太鼓の音も腹の深くまで響いてきて、体全体を震わします。スサノオや大蛇が足を踏みしめたままジリジリと動かす動作からは念力を感じ、力強くて、大変かっこよかったです。小河内社中さんのこれぞ神楽！というような迫力ある演舞に引き込まれてしまいました。

私は今回初めて演舞中の大蛇が舞台下に降りてくることを知りました。写真を撮ることに集中していたので、舞台下の私の真横に飛び降りてきた大蛇に不意打ちを食らい大変驚いてしまいました。

また、「国譲」という演目では力比べで岩に見立てた座布団を投げるシーンがあります。岩が舞台から客席に飛んだりして会場は盛り上がります。重そうに投げていた岩を子供がキャッチしたときには会場に笑い声が上がりました。

いつの間にか、周りを見れば舞台の近くに子供たちが集まってきていました。不思議に思っていたら、なんと餅まきが始まるではありませんか。神楽で餅まきをするなんて、とても嬉しいサプライズです。子供たちが餅まきのタイミングを見計らって近寄ってくる姿がとてもかわいらしかったです。本当にここの神楽は地域の中に根ざしているのだなと感じた光景でした。

また、大蛇が怖くて子供が泣いたり、それを見て観客が笑ったりと、神楽を見ている人々のとても楽しそうな姿が印象的でした。

小河内社中の歩み

七月十七日、午後七時三〇分、再び小河内社中を訪ねました。二日後に行われる海潮幼稚園と夜神楽大会での公演の打合せにお邪魔しました。社中のみなさんは、私たちをとても温かく迎えてくださいました。

最初に見せていただいたのが、神楽の台本です。本の扉には「神能記」と書いてありました。とても古いもので、紙が傷んでいるため、裏打ちの補強がされています。

小河内社中は文化八（一八一一）年の須我神社の古文書に記載されています。二百年前のものですが、少なくてもさらに百年さかのぼり、三百年前ぐらいから小河内社中はあったのではないかといわ

■（右上）笛・合調子担当の女子高校生。（左上）準備中の姫役の男子高校生。（右下）「簸の川大蛇」の一場面。（左下）「国譲」での力比べの場面。

■7月17日、小河内社中の打合せにお邪魔したときの様子。

れています。

神楽の活動は現在、女性を一名含め十名でされており、人手が足りないときは地元の中高生や周りの社中から手伝いに来ていただいています。神楽の公演は、近頃では一年間に三十七～四十回ほどですが、最も多かったときは六十回もされていたそうです。

小河内社中は今からおよそ一〇〇年前に出雲大社教の神楽に指定されました。そのため、地元の神社の秋祭りだけではなく、出雲大社での奉納神楽もされています。

このほか、さまざまな催しに呼ばれて公演されており、それも地元に限らず、松江や奥出雲、遠くは広島まで行くこともあります。二十年来の付き合いがある奥出雲では、演じている途中にお客さんがステージに上がってきて一緒に鼓や小太鼓をたたいたり、子供も一緒に踊ったりするなど大変賑やかです。小河内社中のみなさんも舞っていて楽しいと話されていました。

海外公演にも行きました。ドイツのミュンヘンやデュッセルドルフ、ゾーリンゲンなどで公演をされたことがあり、そのときもアンコールがあり大変好評だったそうです。

ちなみに、小河内社中では神楽公演の出演料は決めていないそうです。「なんぼもらっても一緒。汗かく量は同じだから」と言う社中のみなさんの、からっとした笑顔が印象的でした。いつでも、神楽を一生懸命されていることが伝わってきました。

■（右上）社中の方と鬼の面を見る倉上さん。（右中段）大蛇の衣装を着せてもらう筆者。（右下）大蛇の頭を被る筆者。（左上）刀の使い方を実演する松本さん。（左中段）「神能記」。（左下）面や採物を見せていただいているところ。

衣装を着けて神楽を体験！

社中の皆さんのご好意で、次の公演のために荷造りしてあった衣装や面などをわざわざ出して見せていただきました。使っている刀は、なんと金属製で、刃こそついていませんが本物の武器のように危ないものです。その刀で松本さんが演舞中の刀の使い方を実演してくださいました。コツは体の周りによせて動かすことで、刀の向き、回し方にも注意して、けがをしないようにします。

大蛇や鬼の面も出して見せてくださいました。どちらも険しい顔で、しかも大きいので迫力があります。私は大蛇の頭や蛇胴を着させていただきました。大蛇の頭は木製で、予想以上に重く、頭で支えるのがやっとという感じです。しかも頭の内側からの視界は狭くて、周りはよく見えません。その上蛇胴を着て、あの激しい動きをしなくてはいけないなんて、大蛇の役は大変です。

また、取材班の学生三人がそれぞれ選んだ衣装を着させてくださいました。着付けをしてもらったあと、榊や扇などの採物（とりもの）を持って舞の指南をしていただきました。笛を吹いてくださったり、掛け声をかけて下さったりと、本当に神楽のなりきり体験をさせていただいた気分で、とても楽しい時間でした。そのとき、笛の音が鳴ると空間がピンと張ることに気づきました。

■着付けをしていただいているところ。

心躍る神楽の音楽

神楽は奏楽が大事です。音に力強さがあると舞にも力強さが出てくる、と社中の方は話されます。また、楽をやっている人と舞手の人は、お互いに今日は調子がよかった、悪かったということを評価しあっているのだそうです。音の違いが自然とわかるのは、昔から耳で覚えるほ

■（右）衣装を着け、社中の方に舞を習う取材班。（左上）夜神楽大会での小河内社中の奏楽の様子。（左下）海潮幼稚園での公演の様子。子供がスサノオの動きを真似している。

ど聞いてきたし、それだけ身近に感じてきたからだといいます。

神楽の楽は人々の心に根付いている音楽でもあります。笛の音は不思議なもので、小河内社中が老人ホームに神楽公演に行ったとき、まったくしゃべらなかった人が話すようになったことがあったそうです。実際、神楽の奏楽を聴く治療法まであるようです。そのご老人たちにとっては、それだけ地域の神楽と一緒に成長してきて、いつも近くに神楽の音があったのだと思います。

また、社中のみなさんは、神楽の話をすると、農業で疲れていても元気になる、と笑顔で話されます。神楽がほんとに好きなことが伝わってきます。神楽のリズムが好きで、笛の音を聞くと自然と体が動きだすのだそうです。まさに血が騒ぐ、といった感じです。神楽の楽は、いろんな人の思い出の音楽になっています。

次の世代につなげたい

七月十九日。三回目の取材の日です。まずは海潮幼稚園に向かいました。この日は幼稚園の「なつまつり」で、小河内社中の神楽もあります。演目は「簸の川大蛇」。泣きそうになっている子もいましたが、じっと見たり、動きを真似したり、興味を持っている子が多いように感じました。公演が終わるとカレーパーティーです。私たちも社中のみなさんと一緒にいただきました。

この日は、夜七時から「夜神楽大会」があります。それに合わせ私たちも会場の「神楽の宿」に移動しました。

小河内周辺の海潮地区は、神楽が盛んなところで、大東町にある五つの神楽社中のうち四つが海潮地区にあります。夜神楽大会は五社中と海潮中学校神楽部が勢ぞろいし、神楽を演じる催しで、今年が二十三回目だそうです。

会場である「神楽の宿」は、大東町須賀に築百年以上の民家を移築して建てられました。風情あふれる茅葺民家で行われる神楽はより一層厳かな雰囲気があります。夜の神楽ということもあり、舞台側だけがまるで別世界のように光っていて綺麗でした。

海潮中学校神楽部は「陰陽」と「簸の川大蛇退治」の二演目を演じました。バレーや剣道、いろんな部活を兼部しながら毎週集まって練習してきました。スサノオ役がまだ中学生ながらすごく迫力があって驚いてしまいました。

神楽は一度中断すると復活がなかなか難しいといいます。楽や舞の代々伝わってきたそのままの雰囲気を知ることができなくなるからです。そのため、小河内社中のみなさんも後世へ神楽をどう残していくか、いつも考えていると話されます。神楽をするときは、それを見た子供たちがやってみたいと思ってくれたら、という思いを込めて演じているそうです。

取材を通し、自分たちが暮らしている地域に昔からの伝統芸能があることは幸せなことだと感じました。神楽は、人々にとって地域のつながりを保つものであり、また大きな娯楽の一つにもなっています。人々の心の中には、神楽とともに歩んできた年月の分だけ、思い出が詰まっているはずです。このままずっと神楽の伝統と思い出が、後世まで継承され続けることを願っています。

余談ですが、小河内社中のみなさんに神楽に出てみないかと誘っていただきました。嬉しさ半面、戸惑いもありますが、ぜひ参加してみたいと思っています。

（いとう・さき／文化資源学系一年生）

■（上）夜神楽大会の会場「神楽の宿」。（下）「ホタルと神楽の夕べ」でのスサノオの演舞。